復讐は連鎖する。
君が受けた痛みは、忘れることはないだろう。
怨嗟は連鎖する。
君が与えた痛みは、忘れられることはないだろう。

――。

ある日、一人のオペレーターがロドス製薬から失踪した。
コードネームをヴァーミルと言う。
シンプルな構造である旧式のリカーブボウを扱い、主に狙撃チームの一員として活動していたヴァルポの女性である。
彼女は極めて優秀な狩人だった。
狩猟を生業としていたからか、野外における単独行動に秀でていた。夜目が利き、直観が鋭く、判断力に優れていた。
しかし、最近では連携行動にも順応し、前線を援護する役割をきっちりと果たしていた。
粗野な振る舞いが目立つものの、人付き合いに不器用な方ではなく、素朴で素直な性格からチームのメンバーからは概ね良い印象を受けていたようだった。

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

また、自分の人生について、達観した姿勢を示す傾向にあった。
進行した源石病についても、なってしまったものは仕方がない、というスタンスだ。
彼女の身体的な特徴の最も大きなものである隻腕についても、義手があり弓が引けるなら問題はない、と嘆く様子もなかった。
本来ならば、彼女はわざわざ自分の病状を深刻に受け止め、ロドス製薬に治療を申し込む事はなかっただろう。
詳しい経緯は伏せるが、彼女は最終的にロドス製薬での治療に同意し、それに関する医療費もしっかりと支払われている。

彼女の失踪に気付いたのは、凡そ二十四時間前。
作戦従事前のメディカルチェックを担当する医療オペレーターからの報告により発覚した。
何時になっても、ヴァーミルが健康診断に来ないという。
そこで、彼女に割り当てられていた私室を訪ねると、既に姿を晦ましていたらしい。
ロドス製薬内が、彼女を探して奔走していた。
しかし、探せど探せど、彼女は見つからなかった。
艦の中を幾度となく探しても、痕跡すら掴めなかった。

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

……。

逐次報告される情報を聞き、ドクターは作戦の練り直しを検討し始めようとしていた。

現在、ロドス製薬はシラクーザを南に、ウルサスを北にそれぞれ置いた実効支配区域の境界に停泊していた。

その一帯は、シラクーザにおいては荒野が広がっており、そこにはウルサスの迫害から逃れて移り住もうとする源石病患者の亡命が近年では後を絶たないようだった。

ドクターが計画をしていた作戦行動は、人命救助の活動である。

シラクーザの荒野が広がる地区で難民キャンプを張っている患者の治療を行おうという活動が、表向きの作戦行動だった。

しかし、本命は違うところにある。

この難民キャンプを狙う傭兵が活発に行動しているという情報がもたらされた為、より安全な場所への避難が完了するまでの間の警備――という名の戦闘行為が、主たる目的となっていた。

同時に可能であるならば、近隣に潜伏している傭兵の団体の無力化をも狙う算段だった。

既に難民キャンプへの医療オペレーターの派遣が完了し、周囲を警備する体制を整えた矢先に、前述の失踪が重なったのだ。

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

ヴァーミルはこの一帯の出身だという。
森林の生い茂る地域の為、土地勘のある人物による助言は欠かせないと、ドクターは考えていた。
彼女を作戦の主軸に据え、彼女の先導をもって傭兵隊への先制攻撃の実施をしようとしていた。
それ故に、彼女の失踪によって大きく計画が狂ってしまっていた。

ドクターは、深い、深い、思考の海に沈んでいった。
彼女は、何処へ消えてしまったのだろうか。
勤務態度に問題は無く、不満を抱く気配を感じることもなかった。
協調性に問題があるわけではなく、作戦に不満を抱く気配もなかった。
ドクターは、彼女の最近の仕草に不自然なところがなかったか思い返したが、ぶっきらぼうな口調で話す彼女の姿しか思い返せずにいた。
暫くの間手を止めて思い返していたが、徒労だと悟り、再び近隣の地図を確認しようと書類に手を伸ばす。

はらり、と、何枚かの書類が机から零れ落ちていった。
思わず心の中で舌打ちをしながら、ドクターは椅子から立ち上がり、その書類を拾い

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

上げる。
拾い上げた書類を、席に戻りながら、無意識に眺めていた。
その内の一枚は、攻撃対象となる傭兵隊の主だったメンバーの顔写真が掲載されたものだった。
何回も見返した書類であったが、不思議とこの時、ドクターはすぐに書類の束の中にその一枚を戻すことはしなかった。
傭兵隊の主格の映る写真に、見覚えのあるものが偶然映っていることに気付いた。
それは、彼の首元にぶら下がる首飾りであった。
くっきりと映ってはいなかったが、ドクターはこの時だけは何故か、その首飾りの事に偶然気付くことになった。
その気付きが、次の気付きへと連鎖していく。
ふと思い浮かぶ、ヴァーミルの寂しげな横顔と、
「この爪形の首飾りか」
と、こちらの質問に答える言葉。
その言葉が、頭の中で思い返す事が出来た頃、ドクターは頭を抱えることとなった。

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

「これは、オレの復讐の記念品なんだ」

あの日のヴァーミルが、ドクターに答える。

「オレの仲間を奪ったウルサスの傭兵どもがこれをドッグタグ代わりに身に着けていてな」

彼女が下げていた胸元の首飾りを、ぎゅぅ、と握り締め。

「奴らを絶対に見間違わないように、って……オレも持ってんだ」

くしゃり、と書類を持つ手に、力が籠った。

皺で跡が出来た書類に映るウルサスの傭兵は、不敵に笑っていた。

――。

少女の心の中に微かな炎が灯る。

久しく感じた事の無い、暗い炎だった。

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

随分と昔に消え失せた火種が新しく灯り、じりじりと少女の身を焦がしていった。
何度も、その顔写真を確かめる。
ブリーフィングでホワイトボードに貼り出された写真に写るその男は、ある程度時が経ったとしても忘れる事は無かった。
それでも確信が持てず、何度も詳細を確認した。
やがて、少女が狩人として長年培ってきた観察眼が爪型のドッグタグを捉えると、どす黒い炎が燃え広がった。
その炎は、かつて見た故郷の光景を思い起こさせた。
集落に炎が上がり、あちらこちらで悲鳴が聞こえた。
震えながら物陰に隠れても、足元に広がる血溜まりが恐怖を駆り立てた。
ガタガタと音を立てて家具が倒れ、男の眼がベッドの下を覗き込んで来た瞬間、火の手が上がっている状態であるのに身体が凍り付くような感覚に囚われた。
あの男の表情を、未だに忘れた事が無かった。
忘れる事が、出来なかった。
幾度と無くフラッシュバックする光景を、忘れる事は今後も無いだろう。
真の意味で忘れる事が出来るとすれば、あの光景に映った傭兵を根絶やしにしなければならない。
その復讐心もある時期を境に鳴りを潜めていたが、降って湧いた復讐の機会を得て、

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

深層に刻まれた本能が全身を急き立てる。
気付けば、少女は停泊していたロドス製薬を抜け出していた。
作戦の内容によると、いつものような単独行動は制限されるという。
冗談じゃない、と少女は毒づいた。
こればかりは誰にも譲れない。自分の与り知らぬ所で仇敵が死ぬ等、耐えられない。
自分の運命は、自分でケリを付ける。
夜の森の中を、少女は駆け抜けていく。

――。

それから数時間後。
森の奥深くで廃棄されたシラクーザの前哨基地で、少女は地獄を見ていた。
冷静さを欠いた少女は、普段はしないような失敗をした。
廃墟となった前哨基地の入り口で哨戒をしていた男に対して気が逸り、足元に敷かれていた簡素なトラップに脚を取られてしまったのだ。
それぞれの木に括られた細い糸が足に引っかかると、ガラガラと糸に吊るされていた空き缶が一斉に鳴り始める。
近くを哨戒に回っていた傭兵がそれを聞き、周囲に情報が伝達され、包囲され、そこ

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

からはあっという間であった。
殴られ、蹴られ、踏み躙られ。
気付けば、男たちに組み敷かれていた。
少女の容姿や口調から始めは男だと思われていたが、尋問に際してボディチェックを行った際に、小振りながら膨らみのある胸や局部の感触に、傭兵達はすぐに目を血走らせた。
戦場から戦場へ移り渡り、俗な娯楽に飢えた生活をしていた男達だ。少女は源石病の感染者であったが、いつ死ぬか分からない戦場を飯のタネにしている男たちは、感染症への恐怖よりも性欲の発散に貪欲となった。

少女の苦しそうな声が、打ち放しのコンクリート造りの廃墟の一室に響き渡る。
重低音である少女の声は、規則正しいリズムで紡がれていく。
少女の喉の奥まで、傭兵の一人がいきり立った自身を挿入しては、引き抜いていく。
呼吸器を完全に塞いでしまう程に逞しい男性器で、少女の口をまるで女性器として扱うように、何度もピストン運動を繰り返していた。
顔は常に顎を上げ、口から喉までを一本の孔の様に真っすぐにさせた状態で男根を咥え込まされている。
男が腰を振れば、鼻先から眉間に男の陰嚢の生温かな感触を、顎にはごわりとした陰

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

毛の感触を受けた。
その男と相対するように、もう一人の傭兵も少女の女性器で自身を慰めている。
それまで男を知らなかった少女に、野太い一本の杭を打ち付けられている。
喉奥まで男性器が収まると、生命の危機を感じた身体が痙攣を起こし、女性器がきつく収縮する。
その感触が、禁欲生活の続いた男には堪らなく心地が良かった。
小柄な少女の身体は、宙を浮いていた。
両手、両足を男たちに掴まれながら持ち上げられ、男を慰める為の玩具に成り下がっていた。
少女の喚き声も、男たちの嗜虐心を駆り立てる極上のスパイスだった。
好きなだけ喚け、と嗾けながら、激しく腰を振る。
まるで豚のような鳴き声を少女が漏らすと、周囲を取り巻いていた傭兵たちから下卑た笑い声が上がった。
「あぁ……たまんねぇな……」
と、言葉を漏らすと同時に、排泄行為でも行うかのように、少女の中へ精を吐き出していく。

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

絶頂へ至るまでの予告を何もせず、小便器に用を足す感覚で、少女の口や膣の中に、生臭い体液が容赦なく吐き出されていく。

喉奥で脈動する男性器から、直接食道へと流し込まれ、既に複数人に男の精液が溜まる胃袋の中を更に満たしていく。

少女は、朦朧とした意識の中で、喉の奥から匂う生臭くて、苦くて、気持ち悪い体液に塗れながら、己の無鉄砲さを呪った。

脈動が止まるまで、奥深くまで突き刺されながら、無理やり嚥下させられる。

ようやく解放されたと思えば、代わる代わるに同じように輪姦される。

これで、やっと五、六人目が久しぶりの女を味わったばかりだった。

廃墟に潜伏する傭兵たち全てが用を足すのに、まだ時間がかかる。

少女にとっての地獄は、まだ終わる気配を見せない。

……。

する事を済ませ、傭兵の一人が萎えかけの男性器を剥き出しにしたまま地面に座り、煙草を口に咥えて一服していた。

夜の空気が、一仕事終えた男たちの肌を心地良く冷やしていく。

同じように傭兵の一人が隣に座って催促をしてきたので、煙草を一本差し出してやり、

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

ライターで火をつけた。

「……ガキが、己惚れたな」

ぽつりと、紫煙を燻らせながら、煙草を差し出した男が呟く。

それに対して、男はこくりと頷く。

「知ってるか？　あのガキ、単独でこのアジトに乗り込んできたんだと」

同じように大きく煙を吐き出しながら、隣の男にネックストラップを見せた。

「ロドスだっけか……感染者に対する救済を行ってる製薬会社。私兵を雇っているとは聞いていたが、俺らに対して掃討作戦を打ってたらしいぞ」

ネックストラップに収まっていた社員証と見られるカードには、「ロドス・アイランド製薬」という文字が確かに書かれていた。

度胸だけは評価してやるよ、とネックストラップを見た男は溜め息混じりに嘲笑して、

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

「それにしては、あまりにもお粗末な作戦だな。こんなチビ一匹で行動させるなんて、どうかしてるぜ……」

ネックストラップを見せていた男は、もう用済みだとばかりにそれを投げ捨てた。

「ここに連れて来られた時、隊長の名前を叫んでたな。……居ても立っても居られなかったんだろうさ」

恨まれる仕事をしている自覚はある。

きっと、自分たちが侵略した集落の一つの生き残りだろうと、射精を終えてぼんやりとした思考の中で考えていた。

男たち二人は煙草を咥えながら、部屋の中央部で一人の少女を輪姦している男たちの群れを眺める。

遅すぎる、早く変われ、と男たちの急かす声が聞こえる。

冷静になった二人には、いたいけな少女一人に対して群がる、狂気に囚われた牡のように見えた。

周囲を取り囲む男たちは、暇さえあれば自身の男根を扱いて萎えないようにさせている。

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

目を血走らせて、久方ぶりに味わう牝の孔の味を想像しているのだろう。
そしてそれは、つい十数分前の自分たちも同じだったと、自嘲気味に笑う。
確かに、乳臭いガキではあったが、腐っても戦闘要員なのか程良く引き締まった膣の中は具合が良かったのは間違いなかった。
自分たちを殺しに来たのなら、自分が殺されるまでどのように楽しんでも問題ないだろう。
それでもぼんやりと少女に対して憐れむような感情で眺めていた事に気付くと、苦笑いを浮かべた。
戦闘協定なぞ、くそくらえだ。非正規戦の中を生き抜いてきた男たちにとって、罪悪感をとっくに忘れたものだと思っていたが、まだまだ自分が人間だと思い知る瞬間だった。
煙草をフィルターの際まで吸い切ると、吸い殻を指で弾いて捨てる。
罪悪感を捨てていても、それを上回る肉欲には耐えられない。
一時の休憩を挟んだ二人は、再び狂乱の宴の輪の中に自らの意思で混じっていく。
股間にぶら下げていた一物は、既に再び上向いていて、少女を貫こうと蠢かしながら……。
――。

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

男たちが少女を解放したのは、夜の深まりが解け、少しずつ空が白む気配を見せ始めた頃だった。

何も敷かれていないコンクリートの硬い床の上に、少女の裸体が転がっていた。

糸の切れた操り人形の様に、少女は四肢を投げ出している。

痙攣を起こす気配すら無く、少女の形をした肉の塊が転がっているかのようだった。

日付が変わる前から今にかけて不特定多数の男性と、指を折って数えても数えきれない回数の性交を行ったのだから無理もなかった。

局部は少女の身体に合わない男性器を捻じ込まれた為にぽっかりと口を開け、最早誰のものかも分からない白濁を垂れ流している。

眼の焦点が合っておらず、白目を剥きかねないような虚ろな表情を浮かべている。

男たちは横たわった少女を見て、頬を何度か叩いてみるが、全く反応が無い。

少女の死を疑ったが、まるで蟹のように次から次へと口から泡を噴いているのが確認できた為、まだこの玩具で遊べるようだと安堵した――ごく一部の男は、幼い身体特有の具合の良さが完全に無くなった事に悪態をついてはいたが。

「おい、起きろ」

と、男たちの中から一人が歩み寄り、少女の髪を掴み、上体を起こさせる。

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

その男の身体の至る所に刻まれた刀痕や銃創は、この生業の歴の長さを物語らせた。
実際に、周囲を取り巻く傭兵の男たちからは隊長と呼ばれていた。
隊長は上体の起きた少女の脇に後ろから手を差し、小柄な身体を抱きかかえた。
ラテラーノのステンドグラスに描かれている磔に遭った聖人のような体勢で、少女の身体は宙に浮く。

「……散々嬲った後で悪いが、お前が俺の戦友を殺して回ったやつだな」

意識の無い少女は赤子の様に首が座らず、がくんと前の方へと項垂れるようになった。
隊長は唾をコンクリートへ吐いてからウルサスのスラングを吐いた後に、

「おい、少し離れてろ。吐瀉物塗れになりたくなければな」

と、傭兵たちに命令を出す。
隊長は、部下が命令に従って円形に距離を取ったのを確認した後に、

「おい、起きろっ！」

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

と、少女の胸郭を広げさせるようにしながら、活を入れた。
唐突に後ろから、弓反りになるように身体に衝撃を受けた少女は、程無くして意識を取り戻した。
少女は現状を正確に知らない。
輪姦をされている最中に、身体が苦痛に耐え切れずに意識を手放している為、身体が宙に浮いている事すら分からず、何度か足をばたつかせた。
その足の動きも、すぐに止まる。
目の焦点が合いぽかんとした表情になった後に、少女は腹から込み上げてくる何かを抑えようと必死でもがき始める。
胃袋を満たしたそれが逆流し、食道の中を遡っていく。
喉元に辿りつく頃には、饐えた匂いが鼻孔に纏わりつく。
喉から口の中に、饐えた何かが満たされていくと、口を窄めて外へ出さまいと少女が堪えるものの、
「おぇ……」
噴水の様に、吐瀉物を吐き出した。
固形物は見られず、黄ばみもある白濁が主となった液体を、腹の底から吐き出してい

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

た。
無機質なコンクリートの上に生々しい音を立てながら、水溜まりを作り上げていく。
びちゃ、びちゃ、と。
何かを吐き出すという行為は、解放感を生み出す。
張り詰めていた緊張感が胃袋に詰め込まれた精液を吐き出す事で、解き放たれたようで……。
しゃぁぁ。
と、少女の局部から、小便が漏れ出した。
地面に作られた水溜まりの上にそれが滴り、混じり合う。
その光景を眺め男たちは、隊長の言葉に従って正解だったと心の中で思った。
やがて、少女の上と下の口から液体が漏れなくなると、がくがくと身体を震わせ、再び少女は項垂れた。
「おい」
隊長は、もう一度少女へと問いかけた。
「お前が、俺の戦友を殺して回ったやつだな？」

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

笛を鳴らすような呼吸をしている少女の耳が、ぴくんと動く。

「お前が殺さなかった爺さんから聞かされていてな」

少し千切れたヴァルポの耳が動くのを確認し、怒気の籠った声色で、しかし淡々と問いかける。

「ようやく、合点がいった。お前があの集落の、あのガキだったか」

この言葉の意味を知る傭兵仲間も、少なくなっている。

少なくとも、少女を取り巻く男たちの中では、隊長しか知らない話であった。

それもこれも、復讐の為に、仲間を殺した傭兵たちを一人ひとり殺して回った少女が原因であった。

「あの時、根絶やしにしとけば良かったと、心の底から思うぜ……」

隊長にとって、少女の存在は恐怖の対象であった。

一人ひとり、戦友が謎の死を遂げていく。次は我が身である、と。

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

戦場の只中ではなく、人知れず殺される恐怖が、隊長の心の中にはあった。
それと同時に、憎悪の対象でもあった。
同じ釜の飯を食った戦友を手にかけた怨敵でもあった。
まだ年端もいかぬ少女によって殺められた戦友の無念を晴らす機会を、隊長は思いがけず手に入れていた。

「お前をすぐに楽にさせると思うなよ……？　生きているのを後悔するまで、じっくりと嬲ってから、殺す」

少女は、冷たい氷の刃のような隊長の宣告を聞き、全身が凍り付く思いだった。
散々嬲られ、犯され、吐瀉物や小便を撒き散らした末の現状は、まだ地獄の入り口でしかなかった。
少女が長年抱いていた復讐心は、少女のモノだけではない事をこの段階で思い知る事になる。

復讐は連鎖する。
怨嗟は連鎖する。

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

負の螺旋は、少女の死をもって、終焉を迎える事になるだろう。
取り巻いた男たちが、荒野地区に生息する感染動物や野犬に意識のある状態で喰わせてやろうか、と笑いながら語る声を聞きながら、少女は失意の中で失神した。
――。

『報告書』が、ドクターの前に差し出された。
そこには、この一連の事件の顛末が書かれていた。
鬱屈とした心境を隠せず、すぐにその書類をデスクへと放り出す。
その報告書の内容の要約をすると、こう書かれていた。

ヴァーミルは作戦行動を起こす前に単独で傭兵隊と接敵した事。
傭兵隊に捕虜として捕らえられたヴァーミルを救出、保護を行ったのはラテラーノ公証人役場から出向してきているイグゼキュターである事。
イグゼキュター単独によって傭兵隊の無力化を確認。事前に計画されていたドクターの掃討作戦は中止。結果として目標は達成されることとなる事。
保護されたヴァーミルの衰弱は激しく、経過観察が必要である事。
拷問による肉体的な暴行に加え、性的暴行を酷く受けた可能性が見られる為、心身と

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）

もに医療オペレーターがケアを行う必要がある事。
追記として、ヴァーミルが中絶を希望するならそれに従う事。
精神的に錯乱を起こす事が多くなったヴァーミルの様子がつぶさに報告されている事。
そして、ヴァーミルが失踪した事。
それに伴い、ヴァーミルを連れてきたイグゼキュターも、ロドス製薬との協定を一時的に休止し、捜索に向かう旨が示された事。

ドクターは、その日の仕事が手につかなかった。
傍に居たアーミヤも、普段は小言を言うケルシーも、その日ばかりは咎める事はしなかった。
誰もが人には明かせない心の奥底で、暗い何かを抱えている。
あの時、自分が気付けていたら、とドクターは自分を責めた。
立派な戦術家でも、心の奥底までは覗く事は叶わない。
窓の外を眺めると、シラクーザの荒野に雪が舞っていた。

文庫ページメーカー（フォント：源暎こぶり明朝）